

狂言「千鳥」演出の変遷と尾張津島天王祭り

林 和 利

一、はじめに

狂言「千鳥」は、太郎冠者が主人に命じられて支払いの滞っている酒屋へ行き、代金無しに手練手管で酒を取ってくるという喜劇である。

この狂言と津島祭りの関係については、すでに北川忠彦氏が「狂言『千鳥』と津島祭」と題し、「研究ノート」として発表された論考（以下、北川稿）がある。同じテーマを取り上げて屋上屋を架すような愚行をあえて試みるのは、この祭りの地元、尾張に在住する者の責務として、何か付け加えることはないかと思いついたからである。また、私どもの雲形本研究会の成果も踏まえて、この狂言の和泉流山脇派における演出の変遷も確認してみたい。

なお、私が代表世話人を務める狂言、鳳の会（同人、井上菊次郎・佐藤友彦）主催で二〇〇三年三月一日に特別セミナーを催し、この狂言を取り上げた。そのときの成果も踏まえている。

二、津島祭りについて

呼称のこと

狂言「千鳥」のせりふでは「津島祭（り）」となっているが、津島

市作成のポスターやインターネットの公式サイトなどには「尾張津島天王祭り」と記されており、一般には単に「天王祭り」と呼ばれることが多い。さらには、「津島神祭り」や「提灯祭り」、あるいは「津島川祭り」などと呼ばれることもある。もちろん、「津島祭り」も古来用いられてきた名称である。

このように様々な呼称を持つ祭礼なのであるが、この狂言に採用された時代には「津島祭り」で通っていたのであろう。

祭礼の概要

津島祭りは、大阪天満天神祭および厳島神社管弦祭と並んで日本三大川祭りに数えられることもあれば、京都八坂神社の祇園祭りと並ぶ夏祭りの代表と言われることもある。要するに、全国規模で見たとくにも、代表格に位置づけられてきた祭礼というわけである。

まずは、この祭礼の概要を確認しておこう。

津島市の津島神社で七月第四土曜から日曜もとは旧六月一四、一五（日）に行われる、古くから名高い津島牛頭天王の祭りである。宵祭りには、二隻の船を組んで楽車をつくり、一年を表す三六五個と一二月を表す一二個の提灯で飾る。この楽車が五カ所から出され、稚児の奏する津島囃しに乗って水上から御旅所

の岸へ近づく。同夜は花火も上げられる。翌日の朝祭りには、能衣装や小袖^{こそで}で楽車を飾り、楼閣に能人形一対ずつを飾って川上りをする。白旗の矛^{ほこ}を背負った青年たちが水中に飛び込み、社参のあと、御旅所の祭典と御輿^{みこし}の行列の還御となる。深夜に古伝の秘事とされる神霞^{みよじ}流しがひそかに行われる。約五〇〇年の歴史があるとされ、県の無形文化財に指定されている。

『愛知百科事典』中日新聞社・昭五一

一年を表す三六五個と十二月を表す十二個の提灯^{ちてん}で飾った船のこを、通称「巻わら船」と言っている。その五艘の船がゆらりと天王川公園の池に浮かぶのが名物の祭りであり、毎年大勢の見物客でにぎわう。

起源

津島祭りはいつたいつから始まったのか。その起源に関する説が『津島市史』五(津島市教育委員会・昭五〇)に整理されているので、かいつまんで紹介しておく。

まず、津島について記された古文書『浪合記』記載の説。津島に落ち延びてきた南朝方の良王(後醍醐天皇の曾孫)を守るため、津島武士たちが北朝方の武士を船遊びにことよせて討ち取ったことに始まるというものである。南北朝の争乱にまつわるありがちな伝説だが、信用するにはあたるまい。

つぎに、市江村(佐屋町)に伝わる祭りの由来記『市江祭祀』に記された説。素戔鳴尊が市江島に着いた折、子供たちが遊ぶのを見て稚児の舞を作り、のち疫病流行の際にこの祭祀を行うようになったというもののだが、神話に基づく伝説が史実として認定しうるはずもない。

九世紀中頃、京都の神泉苑へ御霊を鎮め送った祭事が地方に伝播したものの一つであろうとする説。霞に襦袢を封じ込めて流す神霞流しはその名残と説く。

起源説話にまつわる伝説はともかく、川祭りとしての始まりを永享八年(一四三六)とする説と享禄元年(一五二八)とする説があるが、根拠は明確でない。しかし、少なくとも記録上の初出は大永二年(一五二二)であり(大祭筏場車記録)、それ以前の創始であることは疑いない。つまり、これによって享禄元年説は退けられることになる。

変遷

元来、津島祭りには、陸上を引く山車が出ていた。後述するように、慶長四年(一五九九)に初めて堤下と米ノ座が山車をやめて船祭りにしたという記録が残っている。以来、津島五か村すべて川祭りとして祭船を出すようになった。このことは狂言「千鳥」の和泉流の演出に影響を与えたと考えられるが、それについては後述する。津島祭りは江戸初期から中期にかけて最も華麗を極めたと言われる。

前述のように二日目の朝祭りにおいて能人形が出るが、享保二年(一七一七)に藩主の見物があつて、そのとき以降、津島車の一番目の能人形は「高砂」に固定されるようになったという。

また、延享四年(一七四七)の津島大火により多くの道具類が消失し、二百年ほど前、天王川に堤を築いて川は池となり、現在のようにな形になったと言われる。

祭りの本義

この祭礼の本義は、やはり「神葎流し」にあると見てよいであろう。

七月十六日、消灯した暗闇の中で古い真の神葎群が運び出され、天王川へ流される。神秘の行事として執り行われる。その神葎が漂着した地点の町は、川岸に灯明台を立て、「おひともし」と称して毎日その神葎をお守りする。そして、二ヶ月半後、神葎は天王川の小島、神葎島に納められる。

現在、天王川はせき止められて池になっているが、江戸時代中期以前は川として伊勢湾に注いでいた。そのころ、神葎は伊勢湾の遠くまで流れ、流れ着いた先々で盛大な神葎祭りが催されたといふ『津島市史』五。

それほど重視される神葎流しがこの祭礼の本義であることは、ほぼ疑いなく、それゆえの「川」祭りなのであろう。

三、狂言「千鳥」との関係

「千鳥」の成立と当初の演出

すでに知られているように、狂言「千鳥」の最古の上演記録は、永禄六年（一五六三）五月、相国寺八幡で催された石橋勧進能の四日めの番組である。つまり、それ以前に成立したことが明確な狂言なのだが、その記録は曲名のみで、演出内容に関しては不明である。ことに、津島祭りが当初から挿入されていたものかどうかは判然としない。

というのは、北川稿も指摘しているように、天正六年（一五七八）の奥書を持つ『天正狂言本』では、「千鳥」が「はま千鳥」の曲名で収録されているが、須磨・明石が舞台となっていて、津島祭りは出てこないからである。ただし、『天正狂言本』が東北地方で発見され

たものであり、せりふの一部に地方色を漂わせていることを考えると、津島祭りという祭礼があまり知られていない地域で上演されていた狂言の台本であつたための改変と考えることもできる。津島祭りに疎い場合は、『源氏物語』の昔から名所として知られる須磨・明石の方が、千鳥の群居る場所としてふさわしいであろう。「千鳥」のみならず、『天正狂言本』の記述が、そのまま中央で上演されていた狂言の古体であると無条件にみなす傾向があるのは、考え直す必要があるように思う。

この狂言に津島祭りが登場する初出文献は、寛永十九年（一六四二）成立の大蔵流『虎明本』ではあるけれど、それ以前の中央の狂言台本がないのだから、もっと早くにその演出になっていた可能性は充分考えられる。次項の山車の問題もそのことと関係する。

山車のこと

この狂言は、代金を持たない太郎冠者が知恵をしぼって酒屋から酒を取ってくるのが骨子である。そのために、千鳥を伏せたり、山車を引いたり、流鏑馬の真似をして見せるのである。

つまり、山車や流鏑馬のことを持ち出すために祭礼を必要としたのであり、当時、夏祭りの代表的存在であつた津島祭りを題材としたわけである。

ところが問題は、現行の津島祭りはすべて船のダンジリであつて、陸地を引く山車は用いられないことである。北川稿も取り上げているこの問題を再検討してみたい。

前述したように、少なくとも堤下と米ノ座の二カ所はかつて山車を出していた。北川稿も指摘しているが、この二カ所は本来「陸祭り」であり、慶長四年になって初めて「川祭り」になったという記

録が残っている。

『大祭勸例帳』の慶長四年の条に、

堤下米之座陸祭今茲始テ川祭ト成ル(原文は漢文体)

とあるのがそれである。(ただし、北川稿は漢文体を書き下しにした別の文面つまり原文ではないものを引用しており、「川祭」が「川わたり」となっている。)

また、秋祭りにおいては現在も山車が出るのは、その名残かもしれない。

このことについて、北川稿は次のように推考している。

尤も、それがそのまま『千鳥』に写されていると言いつもりはなく、ましてそれによつて現行の『千鳥』の成立を慶長四年以前と押えられるというものでもない。それが舞台芸能である以上、実際の祭の状態をとり入れるにしても、能舞台で演じ易いように、また(津島祭を実際に知らない)多くの観客に理解され易いように、適当に変改を加えることは当然であつた。ただその場合でも余りにも実際とかけ離れた演出は許されないの、この場合慶長以前の堤下・米之座のあり方が、やはり演出を決める下敷きとなつたということは言えるのではあるまいか。

「演出を決める下敷きとなつた」というのは妥当な結論と言える。しかし、「現行の『千鳥』の演出」つまり山車が出る形(ただし、和泉流の演出では出ない)の成立が、慶長四年以前と押さえられるというものでもない」という点は首肯しかねる。

山車が出る形でなくなつてしまつてから「下敷き」にされるといふことは、考えにくい。北川説は、一事で判断する軽率な結論を避けて用心した考え方なのであるがそれに従つて、「かつて山車が出ていたという伝承を下敷きにした」ということになつてしまふ。

(四)

その可能性は希薄であり、いささか無理な説と言わざるを得ない。津島祭りに山車が出ていた時代、つまり慶長三年以前に取り込まれた演出と考える方が、より自然であろう。さらに言つたら、『天正狂言本』の記述にもかかわらず、当初から「津島祭りの山車」を持ち出す演出だつた可能性すら、実は否定しきれないのである。

そして、周知のように和泉流においては山車のことを持ち出さない演出になつているが、それは和泉流宗家が尾張藩召し抱えであり、演者も鑑賞者も同じ尾張藩の津島祭りを熟知していたために、その部分を削らざるを得なかつたのであろう。この点は、北川稿の卓説どおりである。

つまり、本拠地が津島祭りと至近距離にある和泉流は当時の現況を反映せざるを得なかつたが、遠くの他流は反映しなかつたというわけである。ということは、反映しない形が古体という論理になり、それが本来の演出であつたと考える。繰り返すが、山車が出る形は、実際に山車が出ていた時代の演出である公算が大きいのである。

流鏑馬のこと

狂言「千鳥」では、太郎冠者が津島祭りで流鏑馬を見てきたことになつているが、この流鏑馬も現行の祭礼にはない。このことについて北川稿は次のように判断している。

津島の川祭には流鏑馬のことは無く、実はその一月前の五月五日に、やはりお旅所で行なわれるのであるが、狂言ではそれを川祭のこととしていかにもそれらしく巧みにとり入れたのであろう。

確にかかつては旧暦五月五日に流鏑馬が行われており、明治以降も新暦の五月五日に改めて執り行われてきた。津島神社社務所の記

録によって、昭和五十年まで続けられていたことがわかるが、近年は神主が弓を射る形に変えられており、馬は出ない。

では、津島祭りの日には往昔からまったく流鏑馬が行われなかったのかということが気になるが、それに関する記録は見いだせない。記録がない以上、現時点では北川稿の説が妥当な見解かと見るほかない。

ただし、地元の民俗芸能に関する古文献『津島踊記』⁽⁶⁾には「菟馬^{うま}」について言及されており、しかもそれを必ず行つたと記されていることから、この地では古くから流鏑馬に類する競べ馬が行われていたことがうかがえる。津島祭りにおいても流鏑馬が行われた可能性が皆無とはいえない。

仮にそうであったにしても、すでに流鏑馬が行われなくなつてからも、至近距離の和泉流でさえ採用し続けてきたと言ふ事実は、現況を反映するという前項の論理といささか食いちがう。しかしこれは、戯曲構成上の問題として説明が付く。つまり、流鏑馬を省いたのでは、その真似に興じる際に酒を奪つて逃げていくという終局場面が成立しなくなるからである。どうしても省けない理由があつたというわけである。

津島祭りの一夜酒との関係

「千鳥」は酒の入手を前提にした狂言である。酒との関連において、津島祭りの「一夜酒」のことも気になる。一夜酒とは、白米と麹によつて一夜で醸造する甘酒のことであり、神饌に供えたり、稚児と宮司の盃事（稚児盃事と言ふ）などにも用いられる。戯曲的内容との直接的な関係はないが、酒を前提とした狂言を構想する際に、その動機に関与した可能性はないかと思うのである。

もちろん、神社の祭礼に御神酒はつきものであるけれど、津島祭りの場合はわざわざこの祭礼のために醸造する特別な存在である。通常の御神酒は既成の酒であり、津島祭りのように自前の酒を用いるような事例は少なからう。

津島祭りがこの狂言に採用されたのは、この祭りが当時の代表的夏祭りであり、おそらく都でもよく知られていたことが、その大きな理由ではあるう。しかし、山車が出たり流鏑馬が行われる祭礼はほかにもある。畿内の祭礼ではなく、わざわざ遠くの津島祭りを採用した背景あるいは動機に、酒にまつわる要素がからんだ可能性はないであろうか。

四、和泉流山脇派における演出の変遷

「千鳥」演出の変遷に関して、『天正狂言本』では須磨・明石を背景にしていること、大蔵流と鷺流には山車（山鉾）のことがあるのに、和泉流には出てこないことなどは、前述のとおりであり、すでに知られていることでもあるので繰り返さない。和泉流山脇派にばつて論じる。

私ども雲形本研究会のほか、野崎典子・佐藤友彦・小谷成子・安田徳子（がメンバー）の研究成果により、いわゆる狂言の固定期と目される江戸前期を過ぎてからも、和泉流の、それも宗家系の山脇派においては一部大きな流動性が見られることがわかってきた。

雲形本研究会では、明和二年（一七六五）頃の成立と推定しうる『元喬本』における多数の修正箇所注目して、江戸中後期における山脇派の演出改訂ぶりを解明した。『元喬本』は端本であるため、残念ながら「千鳥」は収録されていないが、本稿の分析はその成果つまり、江戸期山脇派の演出改訂の解明を補うものである。

また、和泉流には、山脇派と三宅派・又三郎派の三派があつて、お互い影響関係はあつても台本・演出の統一は行われず、それぞれ独自の變遷を見せていることも、折に触れて指摘してきた。

本稿が山脇派にしばつて考察するのはそのことを踏まえている。つまり、山脇派だけの變遷を考察することに意味があるのである。

山脇派の最古の台本『天理本』(正保二年=一六四五頃成立)とその流れを受ける『雲形本』(文政十年=一八二七頃成立)を比較してみる。つまり、それによつて江戸前期から後期に至る和泉流家元における演出の變遷が判明するわけである。

なお、『天理本』と『雲形本』の間に位置する『和泉家古本』のことも気になるが、それと『天理本』との主な異同については、『天理本狂言六義』下巻(三弥井書店・平七)収録の「千鳥」頭注で指摘されている。ただし、両者に大きな異同は無い。

『天理本』と『雲形本』の比較

多くの曲において言えることだが、『雲形本』においては大幅な増幅改訂が見られる。「千鳥」におけるその増幅箇所を整理しておく。ただし、『天理本』の書きぶりは「シカ／＼」と省略して記すなど、せりふのすべてが記されているわけではないので、省略の可能性がある部分や小さな異同は除き、明らかに『天理本』時点では無かつたと判断しうるせりふ部分のみ抜き出してみる。

(天)は『天理本』、(雲)は『雲形本』である。なお、翻字にあつては、適宜、読点や引用符を補い、旧字体は新字体に改め、合わせ字は開いて示した。

ア、酒屋の要求に応じて太郎冠者が話を始めようとするくだり。
(天)酒「たゞいられずは、はなせ」と云、シテ「別にはなす

(六)

事も御ざらぬ」と云、酒「はなす事がなくは、いね」と云、シテ「今までいて、酒ももたずに、手ぶりにいなるゝ物か」と云、：「さらば一つはなしませう」

(雲)アト「あられすは歸ておりあれ」、シテ「是はいかな事、是か五町や三町の所てはなし、いたり戻つたりする内には日か暮ますわいの」、アト「さうあらは米の来る迄咄さしませ」、シテ「まだいせらる、常とは違ひます、あの方は御神事ていそがしうて成ませぬわいの」、アト「いや／＼、そなたはいつ来ても咄ておゆきやる、さういはずとも平に咄さしませ」、シテ「ハア」樽ヲ見テ「いか様、早、牛の来る迄かうつゝくりともしてゐられますまい、さうあらは何ぞ咄ませうか」

イ、太郎冠者が津島祭りに行つたと言つくだり。

(天)シテ「去年の夏、津しま祭を見物仕たが、…」

(雲)シテ「あの、こなたは尾張の津島祭りを見させられたか」、アト「聞及つたれとも竟に見ぬわいの」、シテ「身共は今年始めて参つてござるか、見ると聞とは若干の違ひちやと申すか、御神事はいふ迄もない事、面白い事がござつた」

ウ、樽を網に見立てるくだり。

(天)シテ「畏た、あみにはなにをいたさうぞ」と云、酒「なんなりとも」と云、シテ「此樽をあみにもちめませう」と云、酒「よからう」と云

(雲)シテ「網が入ます」、アト「何網か」、シテ「中／＼、アト「ハア身共か方には網はないか」、シテ「何ぞ網になりさうな物はないか見させられ」、アト「何かよからうぞ」

(ト書き略)、シテ「何でもよつござる」、アト「某の方に網に成さうな物はないか」、シテ「何でもよつござる」、アト「何かよからうそ」、シテ「何でもよつござる」、アト「何かよからうそ」、シテ「何でもよつござる」、アト「やあ是く」、シテ「や」、アト「夫は何とおしある」、シテ「ハア、是か、あみに成うかと思ひますか」(ト書き略)、アト「いや愛な者か、あの之か網になるかや」(ト書き略)、シテ「(ト書き略) 其様に怖い顔をさせられては咄はならぬ(ト書き略)、あなかち夫か網になるてはなけれども、こなたさへあみちやと思はせらるればよいてはござらぬか」、アト「成程、さうあらは身共は網ぢやと思はう、急いて咄さしませ」

エ、流鏑馬をして見せることを太郎冠者が提案するくだり。

(天) シテ「やぶさめのわたるに、あての児を馬にのせて、ゆみ矢をもたせて、まとをいさするが面白い」

(雲) シテ「(ト書き略) 先一町に三所、的を立、美しい児が綺麗な衣装を着、弓矢を吃度帯し、馬にうち乗て彼のを片端から薙々と射てまはる(ト書き略)、手前の綺麗さ、あたりの厳しさ、之を咄したらは来年は何か差置て見物にござらうそ」

逆に、『雲形本』の方でまったくカットしてしまった部分もある。ア、帯(縄)を付けた樽を太郎冠者がそつと引いて行こうとして見つかったあとのせりふ。

(天) 酒「樽はどこに成共、おきたい所におけ、上にのつていはやさう」と云、シテ「こなたのいかい男が、あみの

中に入っていたら、自由にひかるゝ物か」と云、酒「それならみまい」と云、シテ「みとむなくは、なあごるじやつそ」と云、酒「いやみまひ」と云、シテ「なんのかのとおしやる」と云て、腹をたつる

(雲) ナシ

イ、流鏑馬の仕方の最中、酒屋が樽を見ているので、太郎冠者がダメダシするくだり。

(天) シテ「それでくんじゆの人がのく物が、其上さむらひじやによつて、はかま・かたぎぬ、ぬりがさてかほをかくいておじやる、そのごとくにして、馬場末まで、みおくらせられひ」

(雲) ナシ(仕方を始める前と最中に見るなど注意するが、さむらいのことは言わない)

このように、『雲形本』では、「千鳥」に関しても増幅の傾向を見せているとともに、他流に比べて大きな変動が見られると言えよう。

『雲形本』記載の別演出

『雲形本』には「又替りの仕様」として、この曲の末尾に別の演出が記されている。それこそが、当時の流動性を物語るものである。そのまま引用しておく。

又替りの仕様

シテ「別にむつかしい事はござらぬ、拍子にかゝつて浜千鳥の友呼声はと申すと、そこで某かちりくやちりくといふて千鳥のよるをふする体をする事でござる」、アト「夫はいと易い事ぢや、某か相手にならう、早う咄さしませ」、シテ「さうあらは咄ませう程に、さあくはやさせられ」、アト「心得た」ト云テ

樽ヲ見テ居て囃ス也、「浜千鳥の友呼声は」、シテ「ちり／＼やちり／＼ちり／＼やちり／＼とちりとむたり」、アト「浜千鳥の友呼声は」、シテ「ちり／＼やちり／＼、あゝ愛にちとわるい事がござるは」、アト「何事ぢや」、シテ「こなたの様に綱を吃度見詰てござつては千鳥かよらぬ程に、よそ見をしてこちらを見すと囃させられ」、アト「いや愛な者か、是は咄ぢや者、何の千鳥かよる者ぢや、其上見てこそ面白けれ、見もせいて何か面白からつ」、シテ「さうではあれとも、洵に千鳥かよると思はねは仕方か出来ぬ、又おもしろい時には左右をします程に、先こちらを見ずとはやさせられ」、アト「さうあらは心得た」、外替リナシ、シテ「むつかしい事ではござらぬ、シカ／＼、馬場先の人を払はせらるゝ分の事でござる」、アト「夫は猶心易い、相手にならう、咄さしませ」、シテ「去ながら愛にちと気の毒な事がござる」、アト「何事ぢや」、シテ「こちらを見る事かなりませぬ」、アト「何ぢや見る事かならぬ」、シテ「ハア」、アト「とは何とした事ぢや」、シテ「若、お顔に矢かあたうかと思ふてあぶなうござる」、アト「あの本の矢を射るか」外替リナシ

本文として掲げられた定番の演出に比べると、傍線部分が増幅しており、それ以外のところも前後している。当時、山脇派の演出は増幅化の傾向にあったと考えられ、それが『雲形本』に反映しているのだが、この替えの演出は、さらに増幅していることから、より新しい演出が示されていると言えよう。

五、むすび

以上の分析・考察によって判明したことを整理してみると、狂言「千鳥」に用いられている「津島祭り」という名称は、尾張

(八)

津島天王祭りの異称として、実際に使われていた。

慶長三年以前の津島祭りには山車が出ており、この狂言で津島祭りの山車のことを持ち出すのは、その時代の反映と考えられる。

『天正狂言本』所収「はま千鳥」には津島祭りが出てこないにもかかわらず、この狂言の成立当初から津島祭りが採用されていた可能性もある。

記録上確認できない流鏝馬のことも、元来は行われた可能性が否定できず、それを取り入れたのかもしれない。

津島祭り採用の理由には、この祭礼用に独自に造る一夜酒との関連も考えられる。

和泉流山脇派においては、江戸中後期においても一部大きな流動性が見られ、「千鳥」もある程度の改変と流動が確認できる。

なお、従来、和泉流の演出として紹介されてきたものは、多くが現行の東京の和泉流、すなわち三宅派の演出であつて、山脇派の演出は取り上げられることは少なく、無視にも等しい状況であつた。

しかし、山脇派の演出は現在も名古屋の狂言共同社に伝えられており、ことに「鳳の会」においては、『雲形本』に準拠して上演していることを申し添えておきたい。

注

- (1) 『芸能史研究』三十一号(昭四五―一九七〇)所収。
- (2) 愛知県社会科教育研究会尾張部会編『尾張のまつり』(浜島書店・平四一九九二)による。
- (3) 愛知県祭礼研究会編『祭礼事典・愛知県』(桜楓社・平三一九九二)の「尾張津島天王祭」の項による。
- (4) 朝日古典全書『狂言集』下(朝日新聞社・昭和三一―一九五六)所収の『天正狂言本』解題による。

(5) 『津島市史』資料篇(三)(津島市教育委員会・昭四六・一九七二)所収。

(6) 同右所収。

(7) その成果の一部は、平成十七年(二〇〇五)七月に早稲田大学国際会議場で開かれた能楽学会研究例会において、「いま、読み解く狂言『雷』」と題して発表した。

(8) 本文引用は、翻刻された『天理本狂言六義』中世の文学(三弥井書店・平七・一九九五)を元にしつつ、原本を写真版で収めた天理善本叢書『狂言六義』下(八木書店・昭五・一九七六)を参照した。

(9) 本文引用は、狂言共同社所蔵の原本による。

【要約】

狂言「千鳥」の演出と、その題材になっている尾張津島天王祭りについての論考。津島祭りの概要や本義を押さえたうえで、「千鳥」との関係における問題点を考察し、和泉流山脇派すなわち家元系における演出の変遷を分析する。

その結果判明したことは、次のとおり。

狂言「千鳥」で用いられる「津島祭り」という名称は、当時の通称と認めやすい。

この狂言で津島祭りの山車のことを持ち出すのは、山車が使われていた慶長三年以前の反映と考えられる。

この狂言の成立当初から津島祭りが採用されていた可能性もある。

記録上確認できない流鏝馬のことも、元来は行われた可能性が否定できず、それを取り入れたのかもしれない。

津島祭り採用の理由には、「一夜酒」との関連も考えられる。

和泉流山脇派においては、江戸中後期においてさえ改変と流動が確認でき、「千鳥」も例外でない。